

# 星の美を紡ぐ—江戸時代 たなばた歌づくし

## Waka of Tanabata – The Star Festival

### ●「たなばた歌づくし」

「たなばた」は、みなさんがご存知の通り、七月七日に行われる星祭りのことです。「しちせき」とも読みます。

「七月七日、為牽牛・織女聚会之夜」（『荆楚歳時記』〈中国・6世紀成立〉）とあるように、古代中国では、牽牛（Aquila〈鷲座〉のAltair）と織女（Lyra〈琴座〉のVega）が、一年に一度、七月七日の夜に天の川を渡って逢う瀬を楽しむとされていました。この伝説と乞巧奠の行事が中国から入り、日本古代の棚機女（たなばたつめ）に関する信仰と習合した結果、「七夕」の行事と七夕の夜に行われる「乞巧奠」の儀式が日本に定着したといわれています。

「乞巧」とは手芸に巧みであるとされた織女にちなみ、婦女子の裁縫が上達することを乞い願うという意味です。

### ●『新板絵入 伊勢物語』（個人蔵）下巻・後見返し「たなばた歌づくし」

『新板絵入 伊勢物語』は正徳五（1715）年に刊行された『伊勢物語』（平安時代前期成立）の注釈書です。企画展示作品（個人蔵）は下巻の後見返しに「たなばた歌づくし」が貼られています。同作品の後見返しに「たなばた歌づくし」を有する本は管見の限り例がなく、とても貴重な例です。掲載されている和歌をご紹介します。

たなばたまつり  
----あまの川----  
けんぎょう しょくじよ  
※挿絵は「乞巧奠」の様子。

天の川 あふせはしばし よどむとも  
ながれてふかき ちぎり成けり  
(二条為冬・鎌倉〜南北朝)

たなばたの なみだのつゆの 玉のをの  
たえぬは秋の ちぎり成けり  
(藤原公明・鎌倉)

七夕の こよひとたのむ かげなれや  
ゆふべの月の つまむかへぶね  
(御製 後醍醐天皇・鎌倉〜南北朝)

よそにても 見まくほしきは 七夕の  
あふよのそらは くもなへだてそ  
(冷泉為秀・南北朝)

たなばたに かける衣の 露けさに  
あかぬけしきを そらにするかな  
(源国信・平安後期・『金葉和歌集』入集)

秋ごとに けふをさしてや あまの川  
わたしそめけん かささぎのはし  
(二条為世・鎌倉後期)

あまの川 まだはつ秋の みじか夜を  
など七夕の ちぎりそめけん  
(大江匡房・平安後期・『続古今』入集)


としにまつ ならひぞつらき あまの川  
あふせはちかき わたりなれども  
(四条隆康・鎌倉後期・『続拾遺』入集)

七夕の いほはた衣 かさねても  
(秋の一夜と) なにちぎりけん  
(中御門経宣・鎌倉〜南北朝・『新拾遺』入集)

七夕の とわたるふねの かぢのはに  
いく秋かきつ つゆの玉つさ  
(藤原俊成・平安後期・鎌倉初期・『新古今』)

七夕の あまの川原の いはまくら  
かはしもはず あけぬこのよは  
(源俊頼・平安後期・『千載和歌集』入集)

七夕の こけのころもを いとはずは  
人なみなみに かしもしてまし  
(能因法師・平安中期・『金葉和歌集』入集)



個人蔵『新板絵入 伊勢物語』下巻

七月七日 たなばた歌づくし よみ人付

### ●江戸時代の女子教訓書にみえる「たなばた歌づくし」

これらの「たなばた歌」は平安～南北朝時代に詠まれたものです。勅撰和歌集の入集歌もありますが、本作品の「たなばた歌」はいずれも室町時代中期成立『題林愚抄』第八・秋部一に収められていることから、『題林愚抄』から採られた可能性が高いといえます。なお、『女大学』に代表される江戸時代の女子教訓書には、本文中に「七夕の歌づくし」を含むものもあります。展示作品『新板絵入 伊勢物語』の読者（おそらく女性）たちも『伊勢物語』を読み味わいながら「たなばた歌づくし」を通して、当時の女性の理想とされた教訓を身につけることが期待されたのかもしれない。